

國策として見たる我が滿洲農業移民 (四)

松 崎 實 次

第一序 說

第二 滿洲農業移民の必要性

第三 滿洲農業移民の可能性 (以上第十三卷第一號掲載)

第四 滿洲農業移民計畫樹立の必要と其の大要 (以上第十三卷第二號掲載)

第五 滿洲農業移民の沿革

A 滿洲事變以前に於ける滿洲農業移民

B 滿洲事變以後に於ける滿洲農業移民

一 天照園移民

二 天理村移民

三 鐵路總局移民

四 鏡泊學園移民

(以上第十三卷第三號掲載)

五 拓務省農業自衛移民

1. 第二次農業自衛移民

國策として見たる我が滿洲農業移民

2 第二次農業自衛移民

3 第三次農業自衛移民

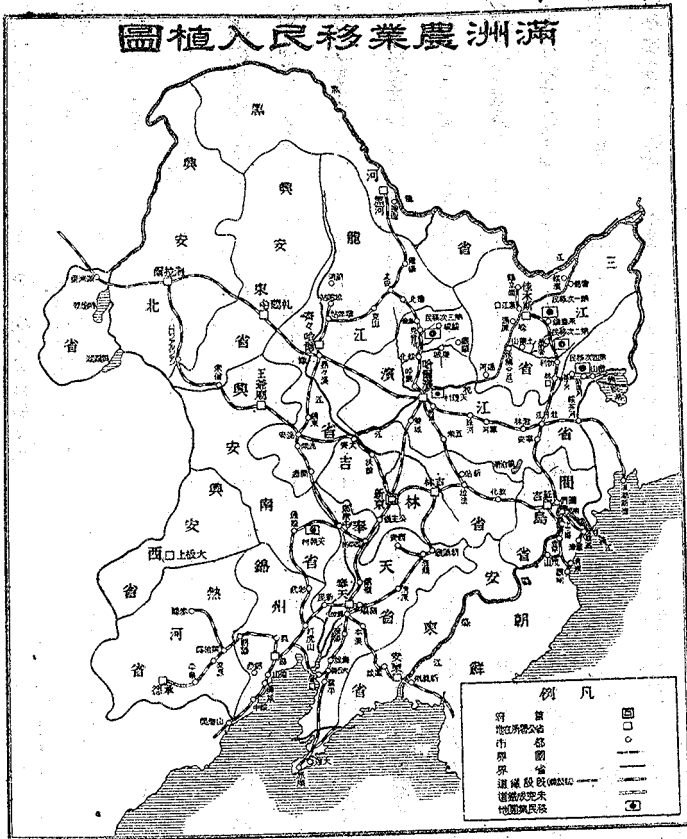
4 第四次農業自衛移民

第六 結 語

五 拓務省農業自衛移民

滿洲事變以後に實施せられた我が滿洲農業移民には、天照園移民、天理村移民、鐵路總局移民、鏡泊園移民等があるが、之等は何れも其の規模が小であつて假令成功を見るとしても、國策的見地から考察すれば其の國家への貢獻も少いのである。従つて其の重要性も亦低度に止まるものと言はねばならぬ。然るに以下述べる所の拓務省自衛移民は、前者と異り我が政府に於て多年調査研究の結果、國策的移民計畫に基いて實施されたものであつて、移民の數の多い點に於て、政府の之が爲めに支出せる經費の大なる點に於て、移民の嚴選、従つて其の素質の優秀なる點に於て、將又政府の之に對する援助が多い點に於て、他の何れの移民に比して一頭地をぬいてゐるのである。しかも常に計畫的、組織的に實施せられてゐるのであつて、其の成功は疑ひなく、政府からも一般國民からも將來に對して非常なる期待がかけられてゐるのである。政府は既に數次に亘つて入植を實行したのみならず、將來も引續いて移民送致をなすことに方針が決定してゐるのである。以下第一次移民より順次述べる事とする。

滿洲農業移民移入植圖



備考 本圖は拓務省拓務局 滿洲農業移民概況に依る

國策として見たる我が滿洲農業移民

1 第一次農業自衛移民

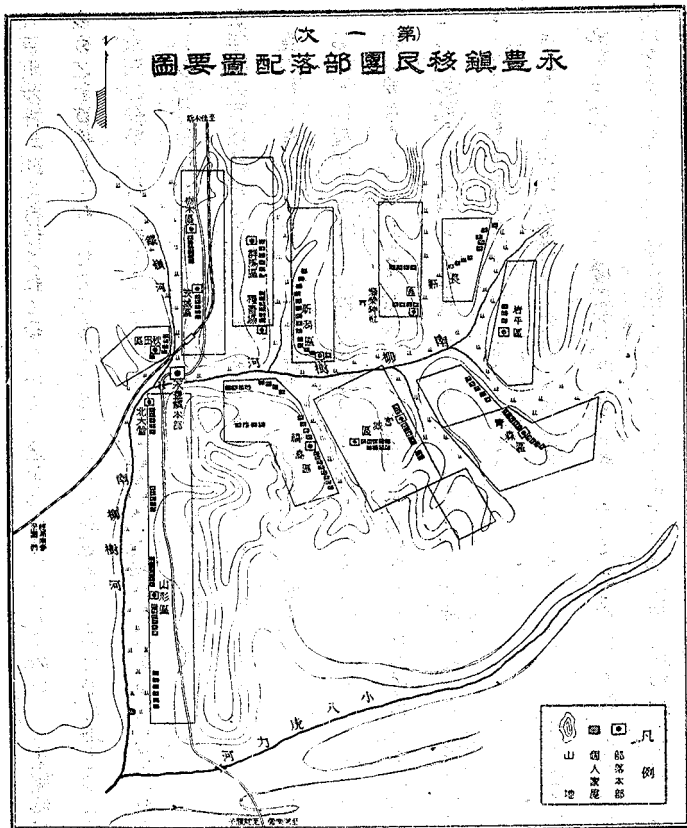
イ 移住地の概況

第二次農業自衛移民の入植地は三江省(舊吉林省)樺川縣永豐鎮といふ所であつて、佳木斯から南々東へ離るゝこと約十四里即ち、大體東經百三十度二十分北緯四十六度二十分に位置し標高二百米突位の高臺である。其の面積は約四萬町歩にして、大部分は森林であるが、内一萬町歩の可耕地があり、地味は肥沃である。それ故に現狀から見れば一人當り二十町歩を要すると

すれば五百人を入植せしめ得る譯である。尤も内地移民が入植する以前に、既に地方土民や朝鮮人移民に依つて五百町歩程が開墾耕作されてゐたから、之を其のまゝにして置いては集團移民を實施するのに都合が悪いから、豫め之を買収しておいたのである。特に吾人の注意をひくのは此の地方では此の移民が入植するよりも數年前から水田の經營が行はれてゐたといふことである。最初には此の地方は稻の發育期間が短く、且つ霜の降るのも早いから稻の發育が不充分なる上に霜害が多い爲めに、凶作を見ることが多いたらうと懸念されてゐたのであるが、數年間の實地經驗に依つて、之は全く杞憂に過ぎないといふことが實證されたのである。平均氣温は八月の三十一度内外が最高であつて、一月の零下三十七度内外が最低である。降雨量は九月の百八十一耗が一番高く、十二月の零點四耗が最も少い。四月頃から解氷期に入るがこの時分から氣温が急に高まつて來て、五月から八月迄に作物が成育するのである。而して此の時期には雲が少くて日照時間が多い爲めに冬籠してゐた一切の草木は生々として枝葉を廣げ作物の發育も自覺ましいのである。斯様に發育期が短い爲めに除草其他の手入れが内地よりは少くてすむから農業經營には好都合である。

地形及び交通機關を見るに周圍一帶は丘陵性の山地であつて、内部は盆地を形成してゐる。そして移住地區の中部から西部にかけて南柳樹河が流れその西北部には鐵嶺河が流れてゐるから、移民はこの二河を利用して灌溉用水をとると共に、交通機關としてゐるのである。其の他交通機關としては、ハルビンとの間に飛行便も開かれたし、又有名な松花江をも盛に利用するのである。更に近年圖們から佳木期に至る圖佳線が完成したから、必要

第一圖 永豊鎮移民團部落配置要圖



備考 向上書に依る
 國策として見たる我が滿洲農業移民

品の買入、生産物の販賣の爲めに輸送上並に一般交通上非常に便利となつたのである。道路は一般によくないけれども、自動車、馬車等の使用が可成盛に行はれてゐる。かくて年と共に交通運輸の機關も整備しつゝあるから、之等の發達に伴つて移民の農事經營も有利になるのは疑ひなき所である。

土質は腐植に富んだ埴土が多い關係上非常に豊度が高く、無肥でも反當り粃で四石、玄米にして二石前後の收

穫が得られるといふ有様である。南部は古生層地帯であつて、砂金、花崗岩、石灰岩等も産出するから將來は之等の採取も盛になるであらう。

移 民 の 募 集

第一次移民を募集するに當つて政府は次の方針を採つたものと思はれる。

- (一) 當時疲弊せる農村が多く、之を匡救することが急務になつてゐたから、なるべく疲弊農村から應募者を求めること
- (二) 北滿は寒氣が厳しいから之に堪へ得る者でなければならぬ。それには東北北陸地方の住民から移民を選定するのが適當であること
- (三) 當時移住地附近には多數の匪賊が居て治安が充分保持されてゐなかつたから、日本軍隊が滿洲各地に駐屯してゐて匪賊の討伐、治安の維持に當つてゐた。而して移民も之等軍隊との緊密なる關係を持たねばならぬから、滿洲駐屯師團管下から募集をなすこと
- (四) 原則として移民は農業に經驗を有する既教育在郷軍人たること
- (五) 従來の移民の失敗に鑑み移民の素質の向上を圖るため身體強健、思想堅實にして年齢三十歳以下であつて困苦缺乏に堪へ得る者なること
- (六) 募集に際しては關係地方官廳帝國在郷軍人會等の諸團體の協力を求めること

以上の諸點を綜合して青森・秋田・岩手・福島・宮城・山形・群馬・栃木・茨城・長野及新潟の十一縣に於て募集をなし、多數の應募者から五百名を嚴選々抜して、彼等を加藤寛治氏の經營する日本國民高等學校に送つて約三週間

に亘つて訓練を施したものである。

ハ 移民の入植及び其の経路

移民は昭和七年十月三日警備指導員豫備歩兵中佐市川益平氏が團長となり、同大尉熊谷伊三郎・同中尉香澤林助・同工藤儀三郎・同騎兵中尉須永良太郎・醫師堀江勇の諸氏に引率せられ東京を出發し、神戸、大連を経て奉天に到着。此所にて北大營日本國民高等學校で訓練を受けて居たところの七十名も之に加はり、新京を過ぎ哈爾濱に着きそれから松花江を下航して佳木斯に出たのが十月十四日であつた。而して彼等は入植準備の爲めに此所に暫く滞在冬營することになつたが、彼等の内百五十名は先遣隊として翌八年二月十一日の佳節を下して、永豊鎮に落付き現地で準備をすることになつたのである。而して其の他の者は引續き佳木斯に逗留して、訓練を受けたり、現地との連絡によつてその事情等を研究してゐたのであるが、遂に準備萬端整ひ、氣候も温くなつて來たので愈々永豊鎮に向ふことになり、四月一日には全員の入植を無事完了することが出來たのである。

ニ 移民團の編成

移民地に於ては入植當時は未だ住宅・農舍等の建築も不充分であり、農具・日用品の生産も整はざる計りであり、時々匪賊の襲撃を受ける有様であつて、人命・財産の危険が多分に残つてゐた。従つて移民各個が個人的に之等の建設・生産・防備等に當つてゐる様では勞苦が多くて効果があがらぬは言ふ迄もない。それ故に移民團では左に記すが如き有効適切なる組織を作り團體的・協同的に活動すると共に、全體の統制を圖ることにしたの

である。

移民團本部 永尊鎮に指導員が中心となつて移民團本部を設け、全移民の指揮監督を行ひ、移民發展に必要な共通事項を處理するのであつて、之が全組織の核心となり指導的重要地位を占めてゐる。

農産加工班 此の班では必要な設備をなして製粉・精米等をなし、之を移民に分配する外移民團員の自給自足を目標として味噌・醬油・酒等をも造る。而して後には漸次其の設備規模を擴大整備して生産の増加を圖り、一般にも之等の販賣をなす意氣込みで班員を督勵してゐるのである。

木工班 荒野開拓を意氣込んで入植した移民も入植當初は住宅不足に不自由を忍ばなければならなかつた。大勢の者が同一家屋に宿泊することは農業經營上に不便があるばかりでなく、日常生活にも差支が少くない。特に家族を有する者には不便が多いのである。然るに彼等は個々別々に大工や左官に依頼して屋舎を建築せんとしても、内地の様に建築請負業者、大工・左官などが居る譯でもないのだから容易に其の目的は達せられない。又建築の一部の仕事は自分で出来るとしても本職でない彼等は自分で大工や左官の仕事を總べて行ふことの出来ぬのは當然である。假りに之等の仕事が或る程度迄爲し得る可能性があるとすると、建築材料の鬼集から設計や建築などを個々別々にやつてゐる様では農事の經營や整備に支障を來たすことになつてしまふ。それ故に大工・左官・石工等が中心となつて木工班を組織し一定の計畫に基いて建築事業を受持つことにしたのである。而して住宅の建築は昭和九年度から着手し、十年度迄に竣功せる住宅が共同家屋五十七軒、個人住宅八十棟十一棟

一戸又は二戸一であつて更に十一年度に十棟を建築する計畫である。

鍛工班 この班は鍛冶工を以て組織し、農具の製造や修繕等をなすのである。此の點についても獨立の農具製造業者や修繕業者の居ない移住地に於ては共同的になつて此の種の仕事をなす班を編成することは必要ないとである。

蹄鐵工班 我が滿洲農業移民は有畜混同農業を以て經營の方針としてゐるのであるから、自然馬の使用も盛に行はれるのである。之が爲めに馬蹄の製造や修繕の仕事が必然的に生ずる。この仕事も素人の農民が各自に遂行することの出來ぬ性質のものであるから、蹄鐵工班を組織して共同事業として之を分擔せしむることになしたのである。尙ほ同班では家畜の病氣治療にも當ることになつてゐる。

販賣部 當初は移民に日用品を販賣する目的を以て組織されたのであるが、將來は移民の生産品を外部に向つて販賣する計畫である。移民は差當り自給自足を目標として農業經營をなすけれども、移民の開墾事業が進み栽培面積が増加され氣候風土にも馴れて耕作法の改善や農業經營の合理化が行はれ、副業も普及發展し治安の維持も確立せらるゝに至れば、生産高も増加し従つて餘剰生産物の分量が加はり之を外部に向つて販賣せねばならなくなるのは想像に難くはない。斯かる時期に到れば此の販賣部が中心となつて販賣の斡旋をする計畫である。

警備班 移民入植當時には移住地區に共産匪其の他の匪賊が出沒し、時々移民部落を襲撃し、治安を亂してゐたから、我軍に於て之が防備に當つてゐたけれども手不足勝であつた。それ故に移民團に於ても自ら警備班

を編成して、武器を備へ警備に當つたのである。而して警備班は十二ヶ小隊より成り、各小隊は約十二名乃至六十名を以て編成し各小隊駐屯の距離は千二百米突乃至二千米突としたのである。

ホ 農業經營の狀況

移民は十二部落に分れて居住し畑作を主とした。就中大豆・大麥・小麥・粟・玉蜀黍等を主體としたが九年度に水稻の試作を行ひたる所其の成績が優良であつたので、農民は之によりて力を得、十年度よりは一躍百町歩餘の栽培耕作するに至り、其の後逐年發展し最近では主要作物たる地位を得るに至つた。

次に昭和八年乃至十一年に至る四ヶ年間に於ける作付面積並に十年度及十一年度に於ける收穫高を表示せん。

年度別作付面積並に十年度收穫高

種別	年次		十年度		十一年度	
	昭和八年度	九年度	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高
大豆	一三、三三〇 ^町	一三、三三〇 ^町	一七、〇〇六 ^町	一、三三〇、〇〇 ^石	一六、六六六 ^町	一、五九九、〇〇 ^石
大麥	一七、六七七	一〇、六六六	六、六六六	八三三、〇〇	二二、六六一	一、六九九、〇〇
小麥	五、三三三	六、六六六	一三、七〇〇	九七五、〇〇	一六、六六六	一、四九七、〇〇
粟	一三、六七七	二九、一〇〇	四〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇	一〇、六六六	一、〇〇〇、〇〇
玉蜀黍	五、三三三	三三、三三三	五、七七七	四〇〇、〇〇	四、三三三	四〇〇、三三三

町歩余に激増したのであつて爾來經營は順調に進んでゐるのは喜ばしいことである。

尙ほ茲に一言したきは、單に收穫高が相當よい成績を示してゐる計りでなく、品質の如きも概して良好であるといふことである。亞麻の如きは初めは悪質だと思はれてゐたけれども、最近では良好であることが知られる様になつた。北海道産の高級品に比しても決して劣つてゐない程の良質のものが生産されるのである。右の表には出てゐないが砂糖大根の如きもよく出来、段當りよければ千五百貫悪くても五百貫位の收穫が得られるのであつて移民は之を原料として、自家用砂糖を製造してゐるのであるが、筆者の聞く所に依れば、最近迄は製造法が悪い爲めに結晶糖が出来ないで飴にしかならぬとのことである。然し研究が重ねられてゐるから、不日成功し得るものと考へるのである。移民は砂糖の不足を補ふために蜜蜂を養育してゐるが、之は非常に成績がよく既に自給自足の程度に達してゐる。又野菜の如きも内地で栽培せらるゝものは殆んど如何なるものでも栽培することが出来、西瓜・茄子・トマト・イチヤベツ・花椰菜・蕪・甘藍等はよいものが生産されるのである。

次に家畜飼養に就て述べんに、既に前にも述べた様に移民の農業は家畜混同農業を經營方針としてゐるのであるから自然家畜の飼育を盛に行ふのである。家畜を飼育するには先づ牧草が豊富にあることを必要とする。然るに移民地方は單に永豊鎮のみでなく他の地方に於ても至る所に牧草の豊かな原野があるから牧畜には極めて有利である。家畜の飼料としては禾本科、荳科の草が―萩・車軸草・南天萩・ルーサン等の草―が適してゐるのである。而して之等の草は此の地方に澤山あり、原野に自然に生ひ茂つてゐるのであるから飼料を得るのに困難はな

い。又家畜飼育に要する土地が充分にあることは言ふまでもない。他方移民村當局に於ても、家畜飼育の奨励に努め、種畜場を設け、指導員を設置して優良種畜の蕃殖を圖つた結果、馬・牛・緬羊・豚・鶏等の家畜がよく生育してゐるのである。

移民地域には山林も豊富にあつて、建築用・薪炭用・家具製作用木材を採取する外、石炭・花崗岩等の有用礦物も生産されてゐる。

更に又冬期に於ける農閑期の勞力利用に努め、農産加工を行つて自給自足經濟の確立に邁進してゐるのである。此の點に就ては前に移民團の編成の項に於て觸れて置いた如くに、種々の班に分れてそれ／＼必要な加工機械・器具を備へて活動してゐるのである。例へば加工機械を購入して製粉・精米・豆油製造・味噌・醬油・酒の醸造や木炭製造をなしてゐるが如き、豚肉加工の爲めに燻煙室を設置してゐるが如くであつて、之等の仕事が発展し、交通運輸機關が発達するに伴つて有利な販路を求むる様になるであらう。

へ 移民の食物と栄養

移民の常食は米・粟の混合食を主とし、之に野菜・漬物の外、昆布・若芽・鹽鮭等の海産物、牛豚肉・鶏卵等の副食物を加へてゐるのであるが、一般に粗食である。而して入植當初には衛生設備も悪しく、氣候風土にも不馴であり、しかも衛生思想も普及徹底してゐなかつた爲めに、アミーバ・赤痢・疫痢・大腸カタル・チブス等に罹る者も多く土民間には天然痘に罹るものも多少あつたけれども、漸次衛生設備の完備、衛生思想の普及徹底、

種痘豫防注射の勵行等に依つて罹病者が減少し、一般に榮養も健康状態も共に良好になつて病死者の如きは次表に示すが如く極めて少數に止つてゐる。男子平均體重の如きも十六貫餘となり現役兵平均體重よりも重くなつた程である。同時に女子も段々丈夫になり、相當激しい勞働にも堪へ得るに至つたのである。次に昭和九年度に於ける移民の患者數を月別に表示せん。

昭和九年度月別新患者發生表

病種	月別												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
神經系統疾患	1	4	1	3	6	3	3	4	1	3	7	8	52
呼吸器疾患	1	8	1	1	6	3	2	1	5	4	9	5	53
消化器疾患	1	1	1	5	9	6	1	6	1	1	9	3	108
循環器疾患	1	2	1	1	1	3	2	1	1	1	1	1	8
眼科疾患	1	3	1	6	6	5	1	1	5	9	4	5	85
耳鼻咽喉科疾患	1	1	1	7	9	2	3	1	4	5	6	1	69
齒科疾患	1	1	1	5	4	1	4	5	1	5	2	5	32
外科系統疾患	1	7	1	5	4	1	5	4	6	2	5	1	32
皮膚科疾患	1	0	1	5	3	2	5	4	6	2	5	1	27
泌尿器疾患	1	0	1	4	6	0	5	3	7	1	3	1	20

計	傳染病	産婦人科疾患
六七		
九六		
六九		
五四		
五一	— —	— —
三四		
五二〇四		
八〇		
七一		
六七七	— —	— —

備考 一、本表は同上書に依る 但し疾患別一年の計及び累計を加ふ
二、一月及び三月は報告を欠く

右により吾人は病種別に考察すれば外科系統疾患最も多く、之に次ぎ皮膚科泌尿器科疾患、消化器疾患、眼科疾患等の順位となり、月別に見れば十月に發病者最も多く、四月、十一月、十二月、五月の順位となることを知ることが出来るが之によりて之等諸病の豫防施設を構する参考とすることが出来ると思ふのである。今試みに昭和七年乃至十年の病死者數を示せば次の如し。

第一次移民病死者數

昭和七年度	昭和八年度
一	三
昭和九年度	昭和十年度
四	一
計	八

ト 家族の招致と團員異動

移民は入植當初は何れも單身渡滿をするのである。それは當時入植地方に匪賊が横行し治安が確保されてゐなかつたのと、個人住宅が不足であつたのと、農事經營の基礎が定まつてゐなかつたなどの事情に依るのである。

然るに政府に於ては過去の経験に鑑み、移民を落付かせて働かす爲めには家族が同居することが必要であるといふことを知つてゐるから、事情が許すに至れば成るべく早く家族を招致せしむる方針を採つてゐるのである。第一次移民にありては入植の年及びその翌年即ち昭和七年及八年には右に述べたるが如き事情であつたから家族を迎へた者はなかつたけれども、昭和九年には妻百二十一名、子四十三名、其の他八名、合計百七十二名の家族を招致し、同年には妻七十六名、子一名、其の他二十一名、合計九十八名を呼び寄せたのである。従つて移民の數は戦病死者、退團者等があつたに不拘、家族招致者、移民の補充等に依りて、昭和七年來の現在員四百七十一名から同十年末には六百二名に増加してゐるのである。之を表示すれば次の如くである。

第一次移民年度地方別補充者、招致家族、現在員數

昭和八年度			昭和七年度			
現在員	招致家族	其後補充者	現在員	招致家族	最初渡航者數	
三			二		八	青森
二			七		四	岩手
三		一	三		三	秋田
三		二	七		元	山形
三			二		三	福島
三			三		七	宮城
三		三	元		四	新潟
二		二	七		元	長野
三			七		元	栃木
三			四		二	群馬
元			三		三	茨城
六			六		七	北大營
七		八	四		三	計

昭和十年年度						昭和九年年度								
計	現在員		家族招致		其後補充者	計	現在員		家族招致		其後補充者			
	家族	移民	其他	子妻			家族	移民	其他	子妻				
三三	一四	一九			三	三〇	二二	一九		六	五			
七	〇	二七			二	二六	九	二七		一	三	五		
元	一四	一五			四	二四	一〇	一四		一	三	六		
空	〇	五		一	五	五	二	三		四	〇	五		
六	三	〇		二	一	八	五	三	〇		三	八		
空	三	三		一	一	四	四	七	三		一	五	二	
七	四	六		三		四	三	一	五		七	八		
六	六	三		二		二	五	三	三		二	〇		
三	七	一			四	一	七	三	一			三		
五	八	四		一		三	四	一	三		一	四	九	
三	元	三		一		七	二	二	三		四	四	三	
八	一	六			一	九	一	五	六		二	一	三	
六〇	二六	三三		二	一	七	五	一七	三		八	三	一〇	

備考 一 同上書一九頁一二一頁参照
 二 本表には指導員を含まず

國策として見たる我が滿洲農業移民

移民の移動に就て見逃がすことの出来ないのは退團者が可成多いといふ事である。即ち次表を見よ。

第一次移民退團者表

昭和七年度	一七名	昭和八年度	九八名
昭和九年度	四七名	昭和十年度	一
計	一六二名		

最初の四百九十三名の中から入植後三年間に百六十二名即ち約三分の一の退團者を出したといふことは、移民發展上の一大障害である。何故斯る多數の退團者を見るに至つたか。拓務省の示す所に従へば次の原因に基くものである。

一 健康不良に因るもの

移民募集に際して嚴重なる身體検査を行ひ、之に合格した者計りを選抜してゐる上に、體軀の鍛練にも意を用ひてゐるに不拘發病者、病死者等が續出するのは遺憾である。病氣の爲めに退團の止むなきに至つた者も少くないであらう。かく病人が相次いで出るのは滿洲の氣候風土に馴れないこと、生活様式が變つたこと、衛生設備が不完全なること、自己の健康保持増進に注意を欠ぎたることなどが主因をなすものと考へる。従つて之等の點に適應する生活が出来、衛生設備の完備と、移民自身の健康上の自覺と注意とが進んでくれば漸次減少されるに至るであらう。

二 あまりに成功を急ぎ過ぎること

移民の中には入植直後から各自の經營が順調に進んで所得も多く、従つてよい生活も出來、故郷への送金も出來ると考へてゐた者もあつたが、實際移住して見ると内地で考へてゐた様に順調に經營が進まない。匪賊の討伐の爲めに勞費がかゝり、農耕法、經營法等に不馴であり且つ研究不充分であつた等の爲めに豫期して居た様な所得が得られなくて、故郷への送金も不可能であり、將來の發展に對する希望さへも失ふに至つた者が尠くない。思ふに滿洲移民に限らず南北米移民でも、布哇移民でも、將又南洋移民でも成功者は幾年かの間基礎を築く爲めに苦勞をしてゐるのであつて、入植早々から多くの利益を擧げること至難であるのは當然のことである。兎角日本人は何事に依らず成功を急ぐ僻があるが、特に滿蒙などへ出て荒蕪地を開拓せんとする者は、氣を長くして將來の大成を期し不斷の努力をなす覺悟を有することが必要である。

三 渡滿後故郷に發生したる家世上の都合によるもの

此の理由に依つて幾人退團したか、又如何なる家世上の都合が發生したかは統計其の他の資料がないから知る由もないのであるけれども、骨を滿洲に埋める程の強い決心をなして移住するなれば、故郷に於ける家世上の都合などで歸郷する筈はないと考へるのである。恐らく此の理由に依つて退團したる者も前述及び後述の理由を同時に加味せられてゐるのではあるまいか。

四 意志薄弱にして移住地經營の困難に堪へ得ざりしこと

國策として見たる我が滿洲農業移民

移民募集に當つてこの點に就ても當局は重要視し、意志強固にして如何なる困苦缺乏にも堪へ得るものたることを條件としてゐる位であるのに、入植後間もなくこの理由に依りて退團する者を生じたのは遺憾千萬である。移民は何れも嘗て軍隊教育を受けた者計りであるから相當強い意志の鍛練を受けてゐる筈である。屢説した如く治安の確保されてゐない地方で、しかも渺茫たる山林原野を開拓する仕事に携はり衛生設備も教育、娯樂設備も整つて居らず、氣候風土も生活様式も異り日用品さへも思ふ様に手に入らぬ處で生活をなし、農事を經營するのであるから、幾多の困難が相次いで生ずることは覺悟しなければならず、従つて之等の困難に堪へ困苦缺乏を甘んじて受けなければならぬ事は當然の事である。訓練所に於ても此の點に關する教育が施されてゐるに違ひない。筆者は今日の教育には意志教育が欠けてゐると考へてゐるのであるが、特に現下の如き非常時局に際しては我が帝國の將來を双肩に擔ふべき青壯年は最も強固なる意志の持主でなければならぬと確信してゐるのである。

以上述べた如き原因によつて多數の退團者を出したとは言へ、尙ほ殘留者は其の後補充入植者を合せて三百三十餘名の多數あり、之に年々招致家族も増加してゐる有様であつて、淘汰さるべき者は大部分淘汰されてしまつたのみならず、退團理由も多くは解消してしまひ、經營も好成績を示す様になつて來たから今後の退團者は僅少に止まるものと思はれるのである。

チ 村制・教育文化其の他の施設

入植後三年餘即ち昭和十年十月非公式ながら自治村制をしき彌榮村と命名した。而して村長には移民團長市川

益平氏が就任し、其の下に助役・収入役其他の役員を置き村政を司ることにしたのである。それと同時に従来の各縣別小隊を區に改め村會議員をして區長を兼ねしめたのであつて、之で自治村としての形態が整ひ其の内容が充實した譯である。他面村の共同的經濟發展に資する爲めに、彌榮村共勵組合を結成して、信用・購買・販賣・利用・請負・事業・加工等の部を設け、合議制を採用して各部擔當事業を活動せしめる仕組とし、村政の圓滿執行と組合の經濟的活動と相和して、新生移民農村彌榮村の發展を期して努力を續けてゐるのである。

之より先昭和九年十一月十四日、移民子弟教化の中心として彌榮尋常高等小學校が設立せられ、指導員山崎芳雄氏が校長となり、移住者中教養深き者が教師となり、移民子弟として必要なる特殊の教育を施すことになつたのである。勿論創立當初は設備も整備されず、児童數も少く教師の經驗も淺い爲めに教授訓育上欠くる所の多かつたのは想像に難くないが、年と共に招致家族も増し従つて児童數も増加し、教職員的一致協力によりて漸次設備も整ひ、教師の經驗も加つてくるに伴つて教育的効果も顯著となり、彌榮村の繁榮の基礎を築く爲めに一大貢獻をなすに至るものと思はれる。

文化施設としては雑誌「北辰」が昭和八年十月に創刊された。之は決して高級なものでもなく、又専門的學問的のものでもなく貧弱なる小冊子に過ぎないが、移民の寄稿せる論文・所感・研究・小品等が載せられ團員に配布されるのであつて、彼等の精神的・文化的影響を與へることが尠くないのである。娛樂機關としては特記する程のものはなく、只氣候のよい時に花摘・ピクニツク等に出掛けたり、運動會を催したり、團員自ら役者となつ

て芝居を演じたりして興じてゐる位のものである。又信仰の中心として彌榮神社が建立せられて居り毎年十月十五日に佳木斯上陸記念の意味も含めて盛大なる祭典が擧げられることになつてゐて、村民は此の日の來るのを樂しみとして待つ有様である。

2 第二次農業自衛移民

イ 移住地の概況

昭和八年に第二次農業自衛移民五百名が三江省依蘭縣湖南營に送られることになつた。彼等の入植せる地方はハルピンの眞東にあつて緯度に於ては永豊鎮と大同小異であるが、四方が開けてゐる點、及び標高百五十米突位であつて前者よりは五十米突程低い位の相違である。地質も腐植質なる壤土若しくは埴土であつて豊度が高いのは農民に有利である。降雨量は一ケ年五百耗内外であつて、總面積は約四萬町歩にして、その中可耕地が約二萬四千町歩を占めてゐる。而して右の中二回に亘つて商租したのであるが、その面積は合計一萬七千二百六十二萬にして、其の金額三十一萬一千七百九十圓である。詳細は次表に就て見られたい。

第一回商租面積及價格表 (單位响、國幣建)

水田可耕地	熟地		荒地		計	
	面積	金額	面積	金額	面積	金額
	—	—	五〇〇	一一、五〇〇	五〇〇	一一、五〇〇

國策として見たる我が滿洲農業移民

(三六九) 七五

計	六 等 地	五 等 地	四 等 地	三 等 地	二 等 地	一 等 地	熟地		荒地		計	
							面積	金額	面積	金額	面積	金額
	六、八六六	一、〇六四	二、二二五	二、一〇二	三、一五三	三、三三三	六四、六八一	三、一六四	二六、八八一	一〇、〇三〇	一九一、五六二	
								一五	三〇	一五	三〇	
								一二三	三六六	一、一八六	一七、四一〇	
								五五	二二〇	二八〇	四、七二〇	
								四二一	二、一〇五	二、五二三	五〇、四五二	
								四五〇	三、一五〇	三、六〇三	八八、二八二	
								二、一〇一	二二、〇一〇	二、四二三	三〇、六七〇	
								八五、一三一	二、一〇五	三、一五〇	八八、二八二	
								四八、三四六	二、一〇五	二、五二三	五〇、四五二	
								四、五〇〇	二二〇	二、五二三	五〇、四五二	
								一七、〇四四	三六六	一、一八六	一七、四一〇	
								六四、六八一	三〇	一〇、〇三〇	一九一、五六二	

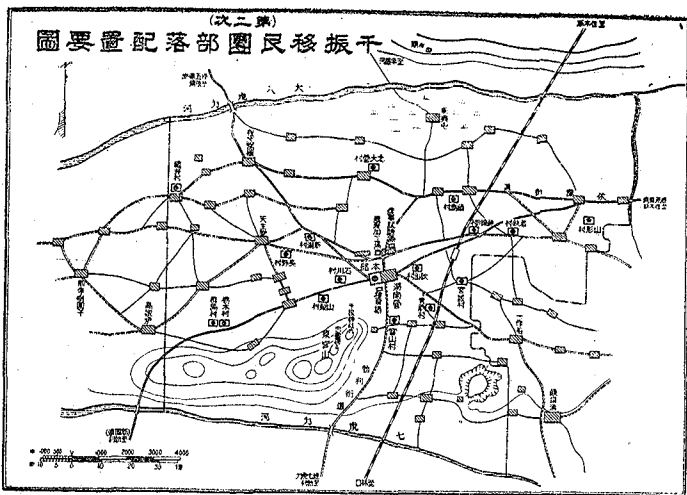
第二回商租面積及價格表 (單位响、國幣建)

備考 一 本表は同上表二八頁に依る

二 一响は我が七反二畝歩に當る

三 右表の金額中には税金、商租經費、建物買收費、墓地移轉費等を含みます

上地	下地	合計
三、六一六	一、八〇八	五、四二四
七二、三二〇	二二、五〇四	九五、八二四
八九八	四一〇	一、八〇八
一一、六七四	一、二三〇	二四、四〇四
四、五一四	二、二二八	七、二三二
八三、九九四	二四、七三四	一〇八、七二八



備考 同上書に依る

備考 一本表は同上二九頁に依る

二 金額中には税金其他の附帯費を含まざること前表と同じ

前記商租價格に税金・諸費用を加算し、邦貨價格に換算すれば第一回の方は一町步當二十八圓七十錢、第二回の方は約三十八圓であつて、兩者平均一町步當三十四圓餘となり、嘗て大連農事株式會社が移民に對して反當り百圓で賣却したのに比すれば如何に安價であるかが諒解せられるであらう。而して土地購入費が僅少であることは、移民資金に重大影響を及ぼすのは當然であつて、之が爲めに貧困なる移民の受くる利益は決して尠くないのである。

尙ほ茲に附言したいのは七虎力河の上流で石炭露頭が発見せられ、之が將來移民發展の爲めに役立つであらうといふことである。如何にして該炭鑛が発見されたかといふと、或る日土着の滿人獵師二人が狐の狩に出掛け、七虎力河畔を逆つて山林に這入つた時に一匹の狐を発見し、之を追ひ廻してゐる中に狐が

穴の中に逃込んだのである。そこで獵師は如何にして之を捕へんかと考へた末、穴の入口で木の葉や樹枝を集めて點火し奥に差込んだ所、火勢が加はり周圍に燃え擴がつた。獵師は此の有様を見て驚いたがよく調べて見ると其所に石炭が堆積して居て、それに火の燃え移つて居ることを發見したのであつた。斯くして偶然に此の炭鑛が發見されたのである。その後調査の結果炭層は長さ三、四十里、幅十里にも及んでゐるらしいとの事實も知れ、移民團當局を驚かしてゐる有様である。將來交通の便が開け利用の道が廣くなり發掘を続けることになれば直接間接移民團に與ふる利益は蓋し大なるものと考へられるのである。

ロ 移民募集及渡滿入植

應募條件は前回と異なる所はなかつたが、募集地域は第一次移民のそれに比し擴大せられ東京・千葉・埼玉・山梨・神奈川・富山・石川・福井の一府七縣が新に加へられ一府十八縣となつたが採用人員は第一次の場合と同じく五百名であつた。而して選拔せられた彼等は群馬縣相馬ヶ原の陸軍演習場廠舎に於て約一ヶ月間の訓練を受けたのである。

昭和八年七月農事指導員現團長宗光彦・警備指導員豫備陸軍歩兵中佐日澤廉次郎・同輜重兵中尉島津寅三・同歩兵中尉多田三郎・醫師大科久榮廣の諸氏に引卒せられ東京を出發し、第一次移民と同様のコースを経て、同月下旬七虎力地方に入植したのであるが、翌九年三月土龍山事件の爲めに禍せられ止むなく湖南營地區に轉住し、此所に落付くことになつたのである。元來此の地方は丁超等を頭目とする反滿抗日團の根據地であつて、度々襲

撃をなし、治安の維持が容易でなかつた。特に匪賊の頭目謝文東が部下三千を率ゐて昭和九年三月入植地を攪亂襲撃し來つたので警備團は必死の防戦をなし、皇軍の援助を得て遂に之を撃退せしめたのである。之が有名なる土龍山事件或は依蘭事件と稱するものである。その後も尙ほ匪賊は度々突撃をなしたことがあるけれども、その度毎に撃退し漸く安泰を得るに至つたのであつて、之が爲めに移民の受けた被害と犠牲とは蓋し甚大なるものがあつた。

ハ 移民團の編成

移民團の編成に就ては第一次移民の場合と大同小異であるから之を省畧する。

ニ 農業經營の狀況

此の移民團は七虎力入植以來共同宿舍の建築、道路や橋梁の建設、警備用塙壁の構築、燃料の採集、土地の測量資源の調査研究・開墾等部落建設の基礎的工作完成に邁進したかひがあつて、漸く其の目的達成の見込もつき、一同は更に一段と一致協力の度を高め、希望に満ちて活動を續けてゐたのであるが、前記せる如く土龍山事件突發の爲めに全力を擧げて之が解決に當らねばならぬ事となり、播種さへ充分にすることが出来なかつたので、その年の秋の取入れは寂しかつた。十年に入りて漸く治安も保たれ平常に復したけれども、尙ほ個人家屋の建築や家族の招致に力を注がねばならなかつた關係上、思ふ様に農耕に専念努力することが出来ず、従つて作付面積の如きも僅に五百十餘町歩に過ぎず、しかも天候が不順勝で六分作の收穫に過ぎなかつたので、收支漸く相償ふ程

度に止まり移民をして失望せしめたのである。然るに十一年度に入りて部落建設基礎工作も出来上つたので眞に安んじて農耕に専念従事することが出来、従つて作付面積の如きも前年度に比し約二倍の千八十町歩餘に上つたのである。詳細は次表の如し。

第二次移民團作付面積及收穫高表

	昭和九年度		昭和十年度		昭和十一年度	
	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高
大豆	三三・三二 <small>町</small>	二二七・九〇 <small>石</small>	一〇九・三〇 <small>町</small>	二、四三〇・八九 <small>石</small>	三二五・三〇 <small>町</small>	三、七五〇・〇〇 <small>石</small>
小麦	四〇・五七	二六六・二〇	一三七・一〇	一、二〇四・七六	二九〇・六〇	三、〇〇〇・一〇
粟	二二・〇九	一六二・九〇	八七・七〇	一、〇七〇・〇三	一一七・八〇	一、三七一・四〇
高粱	一七・七九	一八七・四〇	五三・四七	八四〇・六八	一〇〇・一〇	一、三六・二五
水稻			三六・六〇	一、二四〇・八九	七四・二〇	二、一五六・四〇
蔬菜			二四・九七		六一・六〇	
大麦	二・八七	三三・六〇	一四・四〇	一九六・八一	二一・六〇	
蜀黍	一・九二	一八・三五	五・七七	六五・九五	二六・二〇	
其他	一五・二一		四一・九六		六三・五〇	
計	一三四・七七		五一一・二七		一、〇八〇・八〇	

國策として見たる我が滿洲農業移民

備考 一 同上書三二頁及週報第百〇四號參照

二 昭和十年度は作付面積と收穫高とは必ずしも一致せず

三 昭和十一年度に於ては本表の外に滿鮮人をして水田二五〇町歩、畑地二、六八四町歩を小作せしめたり

四 水稻の收穫高は籾石を以て表す

本移民團に於ても農事經營方針は第一次移民の場合と同様である。即ち農耕を主とし之に配するに牧畜を以てしてゐるのであるが、就中家畜としては牛・馬・綿羊・豚・雞等を主としてゐる。昭和十年末現在に於ける飼育家畜の頭數は次の如くである。

牛	四四頭	馬	二〇四頭
綿	五〇六頭	豚	一九四頭
雞	一二二羽		

此の外家鴨・鶯・蜜蜂等も若干を養育してゐる。而して現在は先づ家畜の改良と蕃殖とに力を注ぎ、爲めに或は種畜場を經營し或は家畜指導員を設置し、或は飼育法・生品の加工法等に於て講習會を開催したりして、副業の發達に努力してゐるのである。

又農産加工にも意を用ひ、精米場・製粉場・味噌・醬酒等の醸造場・麴・油等の製造所其の他煙草葉の乾燥所の設備をなしてゐる。

右に述べたるが如く逐年作付面積も増加し従つて收穫高も加はり、牧畜方面も順調に發展してゐるのである

が、現在の所交通運輸機關の不備の爲めに農産物を賣出すにしても、又物品を買入れるにしても運賃高の爲めに、収益率を引下げられる不利を受けてゐる。一例を舉げんに現地に於て大豆三十噸積貨車一輛分が五百三十三圓の安値にしか賣れないが、之が大連では二千五百圓の相場となつてゐるのである。斯くの如き價格の開きが大中になつてゐるのは、中間商人の利益や、手数料税金等にも因るのであるが、それは寧ろ小部分であつて、大部分は現地から大連に搬出される爲めに要する運賃にとられてしまふのである。即ち右貨物の湖南營から佳木斯迄の運賃が三百二十五圓、佳木斯から哈爾濱が三百圓、哈爾濱から大連迄が九百圓合計千五百二十五圓といふ漢大な運賃を要するのである。それ故に移民の収益を増加せんが爲めには交通運輸機關の發達を圖り運賃を低下せしめることが必要である。此の點に就ては單に本移民團に關する計りでなく、他のすべての移民團に共通する所であるから、日滿兩國政府はもとより、滿鐵其他の運輸業者の協力を得なければならぬのである。各移民地區の交通運輸機關は年々發達してゐるとは言へ、未だ甚だしく不便であるから、特に政府當局に於ては鐵道の敷設、道路・水路等の建設改修等に對しては意を用ひ巨費の投下をも敢て辭せざらんことを切望する次第である。

へ 家族の招致と團員異動

家族の招致の必要なることは既に述べた通りであるから茲には之を再言しない。個人住宅の完成を急ぎその竣功を待つて家族招致が相次いで行はれ、昭和九年には六十三名、同十年には一躍二百三十六名の多數に上り、兩年に於て約三百名を招球したのである。之が爲めに、移民の生活に濫み加はり落付きが出来て來たし又勞力補

給も豊になつて農事經營上にも好都合となつたのである。

退團者も昭和八年に六十三名、同九年に九十八名、合計百六十一名の多數に上つたけれども十年に入りて一人の退團者もなかつたのは意志薄弱者・不健康者・失望者等が去つてしまつたので残留者は最早滿洲生活にも馴れてくるし、治安も確保せられたので將來の見透しも出來、健康上にも自信が得られるに至つた爲めであらう。次の團員の異動を示さん。

第二次移民年度別異動表

最	昭和八年年度			昭和九年年度			昭和十年年度			合計			
	初	渡	航	退	他	招	退	他	招	退	他	招	移
者	者	者	者	者	者	者	者	者	者	者	者	者	者
死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死
戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰
病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病
團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團
充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充
補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補
在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在
員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員
死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死	死
戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰	戰
病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病	病
團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團	團
充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充	充
補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補	補
在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在
員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員	員
族	族	族	族	族	族	族	族	族	族	族	族	族	族
家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
移	移	移	移	移	移	移	移	移	移	移	移	移	移
家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
民	民	民	民	民	民	民	民	民	民	民	民	民	民
妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻	妻
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計

備考 本表の詳細に就ては同上書四三頁及び四四頁を見よ。

ト 村制・教育・其他

本移民團は千振郷を作り共力一致郷の發展に努めつゝある。千振郷と稱するは移住地を流るゝ七虎力河^{チフ}の支那音よりとりたるものと言はれてゐる。同郷を東より西に三區に分ち第一區を山形村・福島村・宮城村・青森村・

神奈川村・若狭の六ヶ村に細分し、第二區を湖南營町・秋田村・北大營村・新潟村・石川村・山梨村・富山村の一町六ヶ村に第三區を福井村・長野村・栃木村・及び群馬村の四ヶ村に區分してゐる。

教育施設としては湖南營に千振小學校あり昭和九年四月二十九日に開設せられ、宗光彦氏が校長となり、農業移民の子弟として必要なる特殊教育を施してゐるのである。設立尙日淺くして未だ設備も欠けたる所多く、兒童數も職員數も少く小規模なものであるが、將來移民の家族數も多くなり、村の經濟も充實するに従つて漸次發展するであらう。又青年に對し農業移民として必須なる訓練を施す爲めに、昭和九年十一月二日に農業移民訓練所が設立せられ、既に卒業生を出したのであつて、之等の者が中堅となつて同郷の發展の爲めに動くことになるのである。

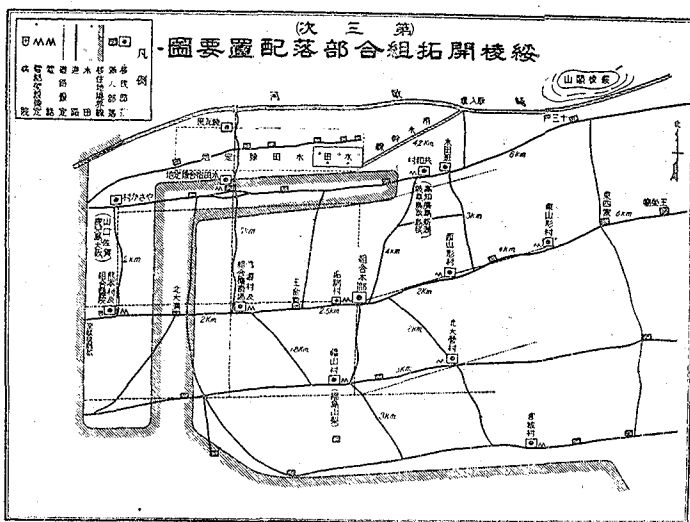
備考 1、千振郷は昭和十一年一月一日から郷制が布かれたが時勢の進運に伴ひ行政機構の改革を必要とするに至り、昭和十四年一月一日から大改革を斷行することに決定してゐる。週報第百四號參照。

2、本稿脱稿校正中に週報第百四號の發行あり。中に第二次移民に關する記事ありて本稿に改定補足したき點あるも印刷に間に合はざるに依り之を后日に譲る。讀者之を諒せられよ。

3 第三次農業自衛移民

イ 移住地の概況

本移民國の最初の入植豫定地は樺川縣小七虎力及京圖線沿線の敦化並に大石頭地區であつたが、其の後豫定が變更せられ、右より遙西方の濱江省綏稜縣北大溝地區に決定せられたのである。此の地區は北緯四十七度十七分



備考 同上書に依る

の所にあつて、綏稜縣城の東北二邦里に位してゐる。

地形は小興安嶺の支脈をなしてゐる大青山々脈の西方の丘陵地帯を占め平均標高二百七十米突であるから、永豊鎮や湖南營地區より餘程高い譯である。努敏河はその北部を流れ灌漑の用に便す。之を利用すれば一千町歩の水田を開くことが出来る見込である。商租面積は一萬九千八百町歩を廣さがあり、中耕作不可能の土地は僅かに千町歩に過ぎぬといふ。大青山地城からは建築並新炭用材を産出し、綏稜開山からは花岗岩も生産される。平均氣温は七月の三十五度を最高とし、二月の零下三十二度餘を最低とし、降水總量は五百耗と報ぜられてゐる。土質は多量の腐植物を含有する埴土であつて地味は極めて肥沃であるから、開墾後十數年間は無肥料で耕作しても收穫を充分あげることが出来ると言はれてゐる。かくの如き豊度の高い土地は内地では恐らく求めることが出来な

いと思はれる。

右の土地を商租するに際しては日滿兩國代表者に依りて土地商租委員會が組織せられ、その商議の結果全地域を十一萬四千圓を以て商租することに決定したのである。尤もこの金額の中には、諸税並に附帯經費見積額二萬三千圓を包含してゐない。即ち一反當り五圓七十五錢であつて、諸費用を合算しても六圓八十七錢に過ぎないのである。

ロ 移民の募集選定及び入植

第一次及第二次移民募集の地域は大體關東・東北・北陸地方であつたが、今回は山陰・山陽・四國・九州地方に及んだ點が異つてゐる。即ち山形・福島・宮城・長野・山梨・新潟・岐阜・鳥取・島根・高知・廣島・山口・福岡・佐賀・熊本・鹿児島等の十六縣に亘つてゐる。募集人員は最初の計畫では前回同様五百名であつたが、土龍山事件の爲め第一次及び第二次移民團に損害が多く、之を救濟する爲めに多額の費用を要したるを以て、經費の關係上三百名に減少するの止むなきに至つた。而して應募資格も今次移民から從來のそれに修正が加へられることになつた。次に其の異なる所を記せば、

- 1 必ずしも既教育在郷軍人であることを要せざること
- 2 金參拾圓を預託し得る者なること

斯くして一般より二百五十名を選定して彼等を山形縣の大高根山形青年道場、茨城縣の日本國民高等學校、兵庫縣の兵庫縣立日本國民高等學校、佐賀縣の神崎郡三田川小學校、熊本縣の縣立球磨農業學校の臨時訓練所に入

所せしめて約一ヶ月間訓練をなしたる上渡滿せしめたのである。而して他の五十名は盛岡高農に於ける第一拓殖訓練所及三重高農に於ける第二拓殖訓練所及び日本國民高等學校の修了生を採用して、之を先遣隊として移住地に先行せしめることとなり農事指導員林恭平、同遠藤六郎、同松井勇の諸氏引率の下に九年十月初旬入植し、拓務省移住建設指導班と協力して、移住地の基本的建設作業に従事することになったのである。

二百五十名の本隊は訓練を了り十月十六日に警備指導員豫備歩兵中尉樋口孝一、同少尉辻質平、醫師佐川豊の諸氏に引率せられ、敦賀港から清津に渡り岡門、蚊河を経て賓北練克音河驛に到着、それより徒歩で北大溝に入植したのである。しかし入植當初にはまだ個人住宅は出来てゐなかつたから、三部落に分れて建築されてゐた共同宿舎に分宿せねばならなかつた。

ハ 農業經營の狀況

第三次移民の農業經營の方針は前二者と異なる所はない。入植後間もなく綏綏開拓組合を組織して移住地の開拓其他の建設事業に主力を注いで活動したのであるが、十年九月に至り、熊本村・やさか村・信濃村・福山村・北大營村・宮城村・東西山形村、共和村・及水田班に別れて生活することになった。此の地方は第一次及び第二次移民地區に比して交通が便利であり且つ匪賊の害も少かつたから、入植早々から農耕は精進することが出来たのは仕合であつた。その爲に早くも昭和十年度には次の如き農耕成績を見、十一年度には作付面積の如きも一躍第一年度の二倍以來に上つた程である。

第三次移民主要作物作付面積及收穫高表

	昭和十一年		同十一年
	作付面積	收穫高	
大豆	九四、一〇	九〇〇、〇〇 <small>石</small>	二三四、九〇
小麦	四六、九〇	二五〇、〇〇	一三七、四〇
大麦	三四、四〇	三五〇、〇〇	七九、八〇
水稻	二五、〇〇	三五〇、〇〇	七三、〇〇
蜀黍	二九、六〇	一五〇、〇〇	三三、九〇
粟	二二、〇〇	二〇〇、〇〇	四九、六〇
其他	八三、一五		一四七、四〇
計	三三五、一五		七五六、〇〇

備考 一、其他の中重なるものは黍・稗・雲豆・綠豆・大麻・燕麥・馬鈴薯等である。

二、詳細は同上書五四頁参照。

三、十一年度の收穫高は不明に付記載せず。

副業として畜産に力を用ひてゐることは従來の移民と異なる所はない。昭和十一年度に於ける家畜の飼育数を擧ぐれば次の如くである。

馬 二八四頭 豚 四七六頭

國策として見たる我が滿洲農業移民

牛 三四頭
山 羊 四頭

綿 羊 三七七頭
家 禽 二二六羽

農産加工をなす爲めに精米製粉部・醸造部・製材部等を設けたる外、共同施設として木工部・鍛工蹄鐵部・自動車部・土工工部(後には煉瓦班を設置)鑿井部・辨事處等を設け部によりては専任者を置いて活動を盛にした。右の内辨事處には最初専任者二名が緩稜縣域に駐在して荷物の輸送其他連絡の任事をなしてゐたが、後に之を興豊鎮に移轉した。

＝ 家 族 招 致

第三次移民が昭和十年年度中に家族を招致した數は大人六十一名小人五十二名計百十三名であつて内妻は四十九名である。尙其の詳細は次表の如くである。

昭和十年年度に於ける第三次移民家族招致數表

縣 別	大 小 人 數	
	大	小
熊 本	一〇	一
山 形	九	五
福 島	三	三
計	二二	一
妻	九	一
其 他	一	一
計	一〇	二
合 計	三二	三

備考 同上書五七頁に依る。但し本表中の數字と拓務要覽昭和十一年版に記する數字との間に相違あり。

4 第四次農業自衛移民

イ 移住地の概況

本移民は濱江省密山縣内の城子河地區に三百名、哈達河地區に二百名に分れて合計五百名入植したのである。先づ城子河地區に就て見るに此の地は穆稷河の左岸に位し林密線鶏西驛を離ること僅に六料に過ぎず。其の北方には山岳地帯連なり、南方は穆稷河に至り、西北方から東南方に向つて緩斜傾をなし、地味肥え農業地として好適である。氣温は最高七月の三十二度位、最低一月の零下四十度であつて、十一月上旬には結氷を始め、四月下

計	佐賀	島根	山口	高島	鳥取	宮城	長野
四九	二	二	二	三	一	二	一五
二二			二			三	
六一	二	二	四	三	一	五	一五
四九	八	五	二	三	三	四	五
三			二				
五二	八	五	四	三	三	四	五
一一三	〇	七	八	六	四	九	二〇

國策として見たる我が滿洲農業移民

旬になりて漸く解氷する。七・八月の頃には降雨が多量にある爲め南滿の様には旱魃の憂は少ないが、穆稜河の低地には水害を受ける懸念がある。昭和九年末に密山・林口間に林密線が開通したから交通の便が開け、同地方の經濟的價値が非常に加はつて來た。

面積は約一萬五千町歩ありて、その内約四千二百町歩は既墾地である。其他にも二荒地或は掩荒地と稱せられる所の事變前に開墾耕作されてゐたが其の後放棄せられてゐる土地が大凡五百町歩もあり又放牧採草地の如きも豊富であるから三百戸を容れるに要する土地は充分にある。該地區の南方を流る、穆稜河を利用すれば水田の開墾耕作も困難ではない。

哈達河地區では城子河地區から約二邦里東方に位して林密線が其の附近を通過して東海驛は地區の中心から二邦里程の所にあるから貨物の輸送・交通等に便利である。地形は東西に長き不正長方形をなしてゐて、西は哈達河を隔てて哈達崗に、東は鍋蓋山地區に接し、北は山岳地帯に、南は穆稜河に向つて緩傾斜をなしてゐる。氣候・土質・地味等は城子河地區と大同小異である。該地區の面積は約六千町歩であつて、其の中既墾地約一千町歩あり、その他にも容易に開墾せらるゝ草地・放牧地・採草地等も豊富であるから二百戸を移住せしめるには足るのである。

ロ 移民の募集選定及入植

今回の募集地域は北海道及び沖繩を除く全國に及び募集地域の廣き點に於て從來に其の例を見ざる所である。

又應募資格にも變更が加へられた。其の重なる點を擧ぐれば、

- 1 徴兵検査終了後滿三十三歳迄の者たること
- 2 現在自ら農耕に従事する者たること、但し移住地の建設並經營に必要な特技を有する者は例外として之を認む
- 3 身體強壯にして殊に呼吸器病、神經系疾患並脚氣等の既往症無き者たること
- 4 金三十圓を預託し得る外入植後約一ケ年間の小遣錢を携行し得る者たること
- 5 移住後故郷に送金する必要なき者たること

右の條件に依つて全國からの應募者につき第一次、及第二次詮衡に依つて五百名を選定した。而して中約百五十名は指導員後備歩兵大尉熊谷伊三郎・同少尉辻賀平諸氏に引率せられて先遣隊として入植し、移住地の建設基礎事業に従事した。他の約三百五十名が本隊として致賀より北鮮經由渡滿をなし昭和十一年三月入植をなしたのである。

ハ 農業經營の狀況

入植後日淺きを以て未だ詳細なる報告を見ないから詳しく述べることは不可能であるが、經營方針は從來のものと同等變りはない。幸にも匪害を蒙ることがなかつたので移住地の建設工作も順調に進行したし又植付・耕作等も妨げなく行はれた。入植後第一年たる昭和十一年度には城子河地區に於て二百九十三町歩、哈達河地區に於て二百三十町歩、合計五百二十三町歩の作付をなし其の秋の收穫に依つて食糧自給の基礎確立の自信を得るに至

つたのは成功と言ふべきである。家畜の如きも馬百三十九頭、牛二十一頭、豚百六十四頭、緬羊五百十一頭、家畜七十八羽を飼養し得たのであつて將來家族招致數も加はり勞力供給が豊になればその發展は疑ひなしと考へるのである。

第六 結 語

筆者は四回に亘つて本問題に就て論じたけれども、資料が充分整はざる上に研究が不足である爲めに尙ほ意を盡さざる所も多く、又述べんと企圖しながら其の意を果さなかつた問題も決して少くないのであるが、之等に點に就ては後日機會を得て論述したき希望である。そは兎も角として以上叙述した所によつて讀者諸彦は優秀なる青壯年を滿洲農業移民として大量に送致し集團的に移住せしめることが現下我が國の國狀から考察して如何に必要であるかを了知せられた事と信ずる。而して今日は最早や滿洲農業移民の可能性があるやなしやの議論をする時代ではなく、既に幾度かの拓務省の試験移民の實績から考へても成功に一點の疑ひなきことも確め得られたのであるから可及的速に之が實行に邁進すべき時であることを知られたであらう。

我が政府に於ても一定計畫のもとに年々着々移民實施に懸命の努力を拂はれてゐるのであるから國民大衆も政府の方針に協力し、之が援助に吝であつてはならない。又自ら移民を志す者は單に自己自身の個人の問題として文ではなく、國家的重要問題たることを自覺して滿洲に永住する覺悟を以て入植しなければならない。而して移住した以上は如何なる困難が降りかゝらうとも斷乎として之を排除し、協力一致して發展を期して邁進すること

が肝要である。只目前のこののみ考へて小利に迷はされ、一攫千金を夢みて眞面目な努力を缺くが如きは大いに戒めねばならぬ事と思ふ。今や皇軍は陸・海・空軍協力して北・中・南支に戦つて蔣政權倒壊に必死の努力を重ね漢口の陥落も眼前に迫つてゐる。他方廣大なる占領地帯には經濟工作が着々進められてゐる。而して親日反共の新支那統一政權もソ・英等の防害あるに不拘準備工作が進められ近き將來に其の成立を見んとしてゐるのであつて、我が政府も極力援助に力を注いでゐるのであるから之が成就の暁には我が國の勢力は澎湃として新支那の天地に漲るであらうことは疑ふ豫地は少しもない。時が到れば邦人の支那進出は目覺ましきものがあるであらう。かくして日本が指導者となり滿支を協力せしめて東洋永遠の平和を確立し、ソ・英などの東洋に於ける蠢動を斷乎として押へてしまはねばならぬ。かく考へ來れば我が滿洲農業移民の重要性は一段と加はるのである。行け滿洲の廣野へ。働け皇國の發展の爲めに。而して國民大衆よ助けよ我が滿洲農業移民を。

(昭和十三年九月三十日稿) (完)